

## 魅せられてく

## 私の「歌」道標

ロード

## 科学と文学のあいだ



## 永田和宏

私は、二度、歌と出会ったというべきなのかもしれない。一度は、学生るとき、高安国世や、同人誌、学生短歌会の仲間を通して。そして、もう一度は、結婚し、就職し、そしてまもなく会社をやめて、無給の研究員として大学へ舞いもどってきたとき。

第一の出会いについては、これまでに何度か書いたことがある。京大短歌会にふらふらとはいり、そこで高安国世に出会い、塔短歌会に入会して、同時に同人誌「幻想派」へも参加した。個人史としては、それらの出会いはもちろん私にとって大きな意味をもつものではあったが、多少のヴァリエーションはあれ、それはだれも同じように経験する歌との出会いであつただろう。今回は、私の第二の歌との出会いについて書いてみよう。

河野裕子に出会ったのは、京都の楽友会館の一室であつた。「幻想派」という学生中心の同人誌を創刊するというので、その顔合わせのために、とりあえず歌会をするということになり、集められたのだった。大学の二回生（京都では、二年生とは言わず、回生というふうに呼び慣わしている）の夏だったのだろうか。

三高時代の古い木造の楽友会館は、その当時、学生がなにかをするという場合にはいつも使った場所である。入り口の踏み石は真ん中がくぼみ、さすがに年代を感じさせていた。みんなより少し早くつくると、そこに河野（という名はあとで知ったのだが）が、ひとり座っていた。彼女が京都女子大の学生で、コスモス短歌会に所属していることを知ったのは、須田剋太画伯による「塔」の表紙、どくだみの絵にととも興味を示し、話しはじめたからだろうか。その夜顔合わせを兼ねた歌会があり、河野の出した歌は、

播すらむとして不意にまがなし少年

めき君はあまりに細き頸くびしている 河野裕子

というものであったが、その夜集まった学生達には、「まがなし」がわからない。はじめて会ったというのに、「なんて、こんなんわからへんの」と平気で言っていたのけた、その生意気さが当夜の印象のすべて。

折しも七〇年大学闘争の時代であつた。私も当然のように一年留

年をしたが、ほとんど歌に浸かりっきりの生活で、専門の物理の勉強をした記憶がない。それにしても、あれだけ好きだった物理にまったくついていけなくなっていたのには、われながら驚いたものだ。歌のほうでは、私は一応学生時代にデビューしたということになっており、総合誌からの依頼に有頂天になりながら、同人誌、そして結社誌と、熱心に読み、またよく書いた。なにより、同年齢の歌人たちとのつきあいが楽しく、週に一度は夜明かしをするといった具合であった。

大学院の試験に落ち、五回生の冬になって、突然就職を思い立ったのは、すでに四年もつきあっていた河野との結婚が大きかったかもしれない。お前には企業は無理だから、という、物理教室の先生のことを無視して、ほとんど落ち延びるような気持で、東京へ就職したのだった。就職一年目に河野と結婚。

東京での生活は、私には楽しかった。青春晩期というべき時期であり、三枝昂之、福島泰樹、清水昶ら同時代の歌人、詩人たちと、なんと新宿で飲んだことだろう。特に三枝昂之からは、理論構築という面で大きな影響を受けた。

一度は落ちこぼれて、学問というものにすっかり見切りをつけた筈なのに、企業の研究所で、自分で仕事をはじめてみると、なんだ研究というのは、こんなに面白いものだったのか、というわけである。なぜ、それに気がつかなかったのか。言うまでもないが、自分でやるということと、教えられたことを理解することとの違いである。自分のやろうとしていることは、世界でまだ誰も知らないことなのだというスリリングな、そして秘密めいた昂揚感、経験したものでないとわかりづらいかもしれない。もう一度自由に研究を

やってみたいという未練が、またぞろ、顔をもたげはじめた。

二十九歳の秋、企業を辞して、京都に舞い戻ってきた。すでに二人の子持ちである。友人のあるものはその〈勇氣〉に感心し、あるものは危惧をあらさまにし、また単純にうらやむものもいた。当方は、無給になるということに、それほど悲愴感はなかった。三十歳を越えたら、もう動けないだろうというかすかな思いはあった。河野が、東京圏では生きていけないということがかなり大きく作用していたことも確かである。

京都に帰って、たちまち三本立ての生活がはじまった。生活のためには、なんらかの形で金をかせがねばならない。幸い塾の講師の口がみつきり、物理を教えることになった。せっかく研究がやりたくて給料を棒にふってきたのだから、研究は当然第一に考えなければならぬ。この頃、夜の十二時以前に研究室をでることは、ほとんどなかった。

それに、歌。足掛け六年東京にいたおかげで、作品と、そして評論を求められる機会が随分増えた。ちやうど三枝昂之とふたりで、作品の個別性をいったんはなれて、どこまで短歌評論を論として自律したものにできるか、またできるだけ単純な原理から、その射程をどこまでひろげることができるかという、試みをしていた頃である。どれも手を抜くわけにはいかなかった。頼まれた原稿を断ったことはなかった。二足の草鞋ならぬ、三足の草鞋であったが、振り返ってみると、五〇枚といった長い評論は、ほとんどこの時期に書いていたような気がする。

このころのわが家は、河野との戦争のようなものであった。河野

は子育て真っ最中。お互いに時間が絶対的に不足している。金はもちろんなかったが、なにより時間ももっとも欲しい。私の歌に割ける時間は、真夜中にかぎられており、それにはだいたい河野もつきあつて何かを書いている。河野にも、この頃から、多くの依頼が来はじめていた。御室仁和寺のそばの、三軒長屋。仕事のできる部屋は一部屋しかない。炬燵の向こうとこちらから足をつっこんで、スタンドの灯を奪い合うようにして、書くのである。

夜中になると、二階で子供が泣く。どちらが面倒を見るかで、いがみ合った。些細なことであつたが、お互いに譲れないというはりつめた空気が、互いを過敏にしていたのかもしれない。

### 睡り足りることなき日々の窓越しに

泰山木の花錆びやすし

『無限軌道』

憎しみは妻に発して子におよぶ子な

れば妻なればその夫なれば

『やくるま』

企業にいるあいだは、就業時間という規制があつたが、規制はまた、それ以外の時間の自由を保障するというメカニズムでもあつた。しかし、こんどはそんなわけにはいかない。研究という職業は、どこまでやったらそれで終りというノルマがないところが、しんどいのである。まして、将来定職につける保障があるわけではまったくない。三年ほど頑張つてみて、成果がでなければ、また転職するか、外国へでも流れていくほかはないだろう。本人は、将来に關しては、

まことに樂天的ではあつたが、一般的に見れば背水の陣というところだろう。

歌さえやめてしまえば、どれだけ楽になるか、そして研究にもっと集中できるだろうと、しょっちゅう考えていた。しかし、ここで歌から撤退するわけにはいかない、と、ちよつと思いつめたような気分があつて、結果的にはそれが、あのような生活のなかで、なお歌への興味を持続させてくれたばかりでなく、研究への意欲をかきたてたところのものであつたのかもしれない。

あの頃、河野が横で歌を作っていなければ、そうは言つても歌は私のもとから去つていつていたのかもしれない。当時、河野は現代歌人協会賞、現代女流短歌賞など、つぎつぎと賞をいただくことになり、私のほうは、それで焦らなかつたと言へば、もちろん嘘になるだろう。しかし、それをも含めて、どこかで歌壇を動かしていけるという、大それた思いさえ、単なる気負い以上の実感として私たちにはあつたような気がする。

そんな頃であつただろうか、岡井隆さんが京都に來られたとき、一緒に東山の法念院を散歩したことがあつた。法然院には河上肇、谷崎潤一郎、川田順をはじめ、多くの文人の墓があり、ふたりでそれらを見てまわつたあと、出口の階段を降りながら、思い切つて質問をした。科学と文学の問題であつた。

岡井さんが、医者としての生活と、歌人としての生活を両立させて來られたことは周知の事実だが、それがそんなに単純なものではないことは、歌集『土地よ、痛みを負え』のあとがきに詳しく述べられている。研究者としての生活と、歌人としての生活の両立に苦しんでいた私は、どのように折り合いをつけていけばいいのか、岡井

永田 和宏  
 手み逢う以前のほくに遠いたくて海への  
 バスに揺られていたり メビウスの地平  
 スバルしずかに硝を覆りつつありと、ほろほ  
 ろと美し古典カウ  
 なにげなきことほなりしがよみがえりあかつ  
 き暗き吃水を越ゆ  
 とともに隔つる腫りの中の花みすくよみ問わ  
 ばゆれはやさしごとをこそ 無限軌道  
 はるかめぐる成層圏のみずぐるよ矢車を  
 くらげ風過ごにけり やぐるま

### 永田 和宏 (ながた・かずひろ)

昭和二十二年、滋賀県生まれ。

京都大学理学部卒。

在学中、京大短歌会に入っ

高安国世を知り、「塔」に入会。

同時に、同人誌「幻想派」

創刊にも参加。

歌集に「メビウスの地平」「やぐるま」

『永田和宏歌集』など。

評論集に『解析短歌論』『同時代の横顔』

『昭和の歌人たち』など。

現在、塔代表。

京都大学胸部疾患研究所教授。



ながらみ賞受賞パーティーにて (95年)。左から、筆者、馬場あき子氏、河野裕子氏。

さんのなまの声を聞いてみたかった。

階段を降りながら、岡井さんの答えは、むしろ意外であった。「一番おもしろいと思うものをやることですよ。研究がおもしろかったら、あなたは研究をやったほうがいい。歌は、また帰ってこられるから」。意表をつかれた気がし、またショックでもあった。確かに言われることは正しい。いま一番おもしろいと思うものに賭ける、それ以外にはないのだ。しかし、にわか「そうですか」とは、もちろん言えなかった。

しかし、岡井さんのことばは、歌と研究という、どこか思いつめていたような二元論的思考に、軽い風穴をあけてくれたようでもあった。あれがだめなら、これもだめ、といったかた苦しい規定などなくてもいいのかもしれない。そのことばをもつてふっきれた、といかないところが凡人の悲しさであろうが、いまになって思えば、岡井さんのことばは、どちらかをやめるとかやめないとか、臆決して考えなくてもいいじゃんか、という方向へ私を連れていってくれたようにも思える。「やめたほうがいいですよ」ということばは、結果的には私を短歌へつなぎとめておく反作用になったのだとも言えるだろうか。二足の草鞋でいいのだと、はっきり自分で思い切れたのは、それから数年後、アメリカでの生活を経て、帰ってきたあとのことであつたにしても。